

## 近代日本の「神話」と「神話崩し」(シンポジウム 「近代日本の『神話』とナショナリズム」)

著者名(日)	成田 龍一
雑誌名	教養研究
巻	15
号	2
ページ	29-39
発行年	2008-12
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1265/00000474/">http://id.nii.ac.jp/1265/00000474/</a>

# 近代日本の「神話」と「神話崩し」

成 田 龍 一

## はじめに

宮沢誠一さんにはじめてお会いしたのは、私が大学院に入ったときのことである。宮沢さんは、そのころすでに学界で活躍され、歴史学のはるかな先達としてさっそうと振舞っておられた。安丸良夫さんの仕事の意味について、宮沢さんから教えを受けたことなど、いまでもよく覚えている。もっとも、歴史学のいろはも知らぬまま大学院に紛れ込んでしまった私は、宮沢さんを遠くから仰ぎ見ていたというのが実のところであった。1970年代中葉のことである。

おりしも、その時期は「戦後歴史学」の再編成期に当たっており、その領導者として宮沢さんは活躍されていた。戦後歴史学の立場からの近世社会の解明を課題とされ、江戸幕府の「支配イデオロギー」やその当時の日本近世史研究の焦点であった幕藩体制についてさかんに発言されていた。

その宮沢さんが、「赤穂浪士」に論及し、『赤穂事件』（三省堂、1999年）の著作を出されたのに続き、『近代日本と「忠臣蔵」幻想』（青木書店、2001年）を出されたことは、私にとってはやや意外の感があった。宮沢さんは、歴史像の再構成——歴史的出来事をつむぎ合わせ叙述することに歴史家としての役割をおいており、かかる「幻想」の領域に踏み込むとは思っていなかったためである。だが、そのあと、宮沢さんは『明治維新の再創造』（青木書店、2005年）という決定的な著作を出され、こうしたいわば表象にかかわる方向を、ご自身の研究のなかに大きく位置づけられていることを知るにいたった。また、宮沢

さんがこうした方向性を持つ研究を手掛けられることによって、きょう、私がこの場に座るという榮譽に恵まれることともなる。

まずは、「〈起源神話〉としての明治維新」と題された宮沢報告の内在的な検討が、私の役割として求められているであろう。そのことを述べたあとに、宮沢さんの仕事の意味を私なりに考察してみたい。きょうのここでの役割は、私自身の議論の提示より、むしろ「〈起源神話〉としての明治維新」という宮沢報告へのいくらか長いコメントとしたい（以下は、論及の対象となるので、敬称は省略させていただく）。

## 1. 「〈起源神話〉としての明治維新」あるいは、「第二維新」をめぐって

宮沢誠一「〈起源神話〉としての明治維新」の報告では、「明治維新」の歴史的な位相を出発点においている。すなわち、「明治維新」は近代日本の出発点であり、体制のみならず、体制に批判的なものにとっても「国民が絶えず立ち帰るべき理想的な原点」——「〈起源神話〉」として機能していたとする。そして、1) 明治維新の出来事のなかに、維新を「正当化する諸理念」の創出の過程をさぐり、2) 現状への批判者が、この出来事を「想起」し、「第二維新」の運動が展開されたことを指摘する。また、3) 「大逆事件」(1910—11年)に焦点を当て、「〈起源神話〉」への批判的言及——いわば「神話崩し」がなされたことを紹介する。

すなわち、「天皇親政」と「公儀輿論」の思想が当初から「矛盾」をはらみ「対立」しており、そのゆえにといってよいであろう、体制側はむろんのこと、体制批判の側も「維新」を根拠とした議論を展開したことを、宮沢は指摘する。そして、ここに「近代のナショナリズム」を見出すとともに、「復古」と「維新」という相反する理念が相互に補完しあうことを主張する。

こうした明治維新を〈起源〉とする動きを、宮沢は、通時的に系譜立てて論じ、自由民権運動、民友社の論客たち、「大正維新」(大正デモクラシー)、さら

に米騒動以降のそれとともに、「昭和維新」(ファシズム)といった近代日本の社会運動史の大筋を呼び出してくる。言葉を換えていえば、「維新」を手がかりとした現状批判の社会運動の系譜が叙述される。

また、社会主義者にかかる「近代のナショナリズム」への外部の批判的な位置に置き、したがって「大逆事件」を曲がり角にした歴史認識を、宮沢は提示する。この論点は、私との接点を提示されたという配慮を感じるが、大逆事件の衝撃のなかで、幸徳秋水をはじめ徳富蘆花、山路愛山らは、それぞれに西郷隆盛を想起したことが論じられる。

さらに、米騒動(1918年)を経ては、堺利彦や白柳秀湖、加藤時次郎ら大逆事件にかかわりを有した論者により、あらたな「明治維新研究」が提出され、この時期の明治維新論には大塩平八郎が多く登場することが指摘される。「大正維新」「昭和維新」が、北一輝『国家改造案原理大綱』などとあわせ紹介される。このとき、宮沢はいつてみれば「神話崩し」の概念を、あわせて提唱していく。岡田嶺雲『明治叛臣伝』を例示しながら、「〈起源神話〉」を批判する「神話崩し」の試み(これは、テキストの解説にも通ずる)とその困難さが論じられる。

このことの歴史的な意味づけとして、宮沢は、1)近代日本の「神話」とは「第二維新」の運動という形態をとった日本のナショナリズムの神話」であり、2)「一君万民思想」の理念に基づいて、中間的な権力を排除しようとする」特徴を持つものとする。この論点は、現時の歴史学研究にとって、あらたな視角を実証を伴いながら提唱したこととなろう。「明治維新の再創造」という営為そのものが、ナショナリズムを作り出していることが説得的に論じられる。

加えて、この議論に当たり、宮沢は、史料の博搜、その内在的な分析、さらに自らの構想への位置づけとそのことによる歴史像の提示という、歴史学研究のお手本のような操作をおこなう。

維新を根拠とした社会運動の系譜——「第二維新」に関しては、かつて松本健一が『第二の維新』(国文社、1979年)として議論したことがある。松本は、「不

完全な革命に終わった明治維新をもう一度やりなおそう、あるいは維新以後だけに  
 変節していった明治維新を第二の維新によって建て直そう」という「第二  
 の維新」を標榜した系譜を（これまた通時的に）たどってみせた。結果的には、  
 松本の議論は「権力支配によってはついに解放・救済されない民衆の、言葉と  
 ならないエトスのなかから思想を掴みだしてくる」試みの系譜の考察となり、  
 『第二の維新』の著作は、近代日本のナショナリズムを扱った思想史となった。  
 『第二の維新』では、赤報隊、宮崎八郎、樽井藤吉、秩父困民党、田中正造、中  
 江兆民、北一輝、高島素之、2. 26事件などの人物や出来事が取り上げられ考  
 察されていた。

このとき、本稿「〈起源神話〉としての明治維新」の元になった宮沢の『明治  
 維新の再創造』を持ち出せば、宮沢の試みは、松本の議論をはるかに細密化し  
 たといえる。扱う対象は、松本が強調する対象とは微妙な差異を持ち、宮沢  
 のばあいには、（松本が、比重をかけて取り上げた）アジア主義者たち、あるい  
 は草莽には重きが置かれていない。宮沢は「近代」の創造に関心があり、反近  
 代を標榜するものは（昭和期の動きを除けば）前景には登場させず、かわって、  
 松本が視野に入れなかった文学作品や歴史学の作品に着目している。この点は、  
 のちの議論で触れることにしよう。また、大逆事件を契機とする「神話」の攻  
 防も、宮沢においては、近代を軸とする対抗のなかで把握されている。

もっとも、「明治維新」とは、様々な出来事をあとから概念化した歴史用語で  
 あり、当初からめざされたある目的を指す語ではない。これに対し、「第二維新」  
 はそのこと自体が目的とされる運動（営為）であり、双方は異なった水準での  
 概念である。「第二維新」と「第二の維新」との差異といってもよいであろう。  
 前者は歴史的・具体的な運動をさすが、後者はそれらを含む分析概念であ  
 る。

このとき、宮沢の稿では、明治維新の再解釈と、「第二維新」を唱える運動（「大  
 正維新」「昭和維新」をふくむ）とが重ねられている。宮沢は、双方を（混在さ

せながらではあるが)ともに視野に収め、「戦後歴史学」の描き出した日本近代における統治と対抗の諸相を読み替えていく試みを行ったともいえる。こうした点からだけでも宮沢の論文「〈起源神話〉としての明治維新」は興味深いのだが、ここまでは入り口にすぎない。

## 2. 「〈起源神話〉」という概念をめぐって

宮沢の仕事の意味を考察するときには、「〈起源神話〉」の概念を検討することになろう。「〈起源神話〉としての明治維新」では、「〈起源神話〉」は「国民が絶えず立ち帰るべき理想的な原点」とされるが、宮沢による「〈起源神話〉」のより詳細な定義は、『明治維新の再創造』でなされている。

近代日本の歴史は、明治維新を起点にしてたんに直線的に発展したのではなく、幕末維新という原点にたえず立ち返りつつ「第二維新」の運動としていわば螺旋的に展開していったのである。それは、明治維新が近代日本において唯一の自前の「革命」であり、後代の人びとが回帰すべき多義性をもった〈起源神話〉として機能していたからであろう。そこに、近代日本の「国民国家」形成と「革命」運動の一つの大きな特質があった。

なるほど、このように説明されると、本論文「〈起源神話〉としての明治維新」は、きわめて明快で一貫した構想に基づいて叙述されていることがわかる。すなわち、近代日本の体制と体制批判の運動を解析していく軸として、「第二維新」の系譜を探る試みと読めるであろう。

だが、これは宮沢がつむいだした世界の一つの系にとどまっている。さらに豊かな可能性が、宮沢の提起には含まれている。さきに指摘したように、大逆事件によって西郷隆盛が想起され、米騒動を経て大塩平八郎が論じられる（鷗外と堺利彦では、評価の逆転が見られることも宮沢は指摘している）などの論

点は、明治維新の表象にかかわる次元に踏み込んでいる。出来事の系譜と、表象の系譜とが双方ともに「第二維新」の名のもとに論じられている。

「〈起源神話〉」を、まずは「起源」(A)と「神話」(B)に分けて考察し、そのうえで再び、宮沢の概念に立ち戻ろう(C)。

(A)「起源」をめぐる論点だが、「起源」といったときに、サイド『始まりの現象』(Beginnings, New York, 1975. 翻訳は法政大学出版局、1992年)を持ち出すまでもなく、その後の展開の構想が「始まり」の記述に凝縮されている。サイドの議論は、著作(書物)の冒頭部分に着目し、そのことにかかわって叙述されているが、歴史の構想力——「起源」をめぐる物語にも「始まりの現象」の可能性が示唆され開かれているであろう。

すなわち、「明治維新」を「〈起源神話〉」というときに、すでに論者には歴史の構想が前提とされており、近代の展開が想念されている。明治維新——自由民権運動——(日清・日露戦争)——大正デモクラシー——(アジア・太平洋戦争)——戦後民主主義という近代日本のプロセスである。これは、宮沢の議論の前提であるとともに、より一般的に「戦後歴史学」が念頭に置く近代日本の歴史の構想である。

宮沢の議論は、この構想に「大正維新」「昭和維新」をかさね合わせたが、「戦後歴史学」がともすればモダニズム／反モダニズムの運動として描き出す「大正デモクラシー」「アジア・太平洋戦争」下の動向を、宮沢は、ナショナリズムを軸に描き出す。

また、(B)「神話」といったときに、通常、近代日本において想念されるのは、天皇制が持ち出した(つまり、近代によって再編成された)「神話」である。明治政府が作り出し、1930年代に「国民」の動員と統制の威力を発揮した即物的な神話である。これに対し、宮沢は、まったく別個の神話として、「明治維新の再創造」としての「神話」の系譜を持ち出す。この「神話」という言い方には、すでに価値判断がふくまれており、かかる物語＝「神話」はきちんとした根拠を有していないという否定的な意味合いを多かれ少なかれ有している。たとえ

ば、対抗する価値を「歴史」としたときには、事実と虚構、価値あるものと想念の産物とする関係性のなかに持ち出され、「神話」は一括して批判の対象とされていく。

(C)さて、こうした「起源」と「神話」の問題系を念頭に置きながら、再び「起源神話」に立ち返ってみよう。このとき、森鷗外の作品である「かのように」(1912年)を補助線としてみたい。大逆事件後に書かれたこの作品は、短編ながら様々のことを想起させる。

まずは、内容を要約すると——主人公の五条秀麿は文科大学の歴史科を卒業し、ベルリンに留学した学生である。「国史」を「畢生の事業として研究」しようとしている。秀麿の親の思惑としては、家督を相続させ「皇室の藩屏」となるにあたり「基礎になる見識」のために留学させた。深い意味はなかったが、ベルリンで秀麿は困難な課題に直面する。1)「<sup>がんらい</sup>原来学問をしたものには、宗教家の謂う「信仰」はない」、2)したがって、「信仰しないと同時に、宗教の必要をも認めなくなる」、3)だが、それでは「危険思想家」であるので、「信仰のないのに信仰のある真似をしたり、宗教の必要を認めないのに、認めている真似をしている」というドイツの状況に直面したのである。

これは秀麿の父親の五条子爵にとっては、神話と歴史の関係となり、「学問」に手を出すことにより、1)「神話を事実として見させては置かない」「神話と歴史とははっきり考え分ける」、2)そのことは「先祖その外の神霊の存在は疑問になって来る」。だが、そのさきには「おそろしい危険」が横たわっているために、3) (みな、神話と歴史を区別しながら)「それをわざと掃き交せて子供に教えて、怪しまずにいるのではあるまいか」という自省へとつらなる。

秀麿は、帰国後、父の内面を忖度しつつ(五条子爵は「神話が歴史ではない」と知悉しつつも、その「言明」を回避し「仮面を被った思想家と同じ穴に陥っている」)、しかしその言明を「良心の命ずるところである」と思い、一種の神経症となる——国史を書くことは、「神話と歴史との限界をはっきりさせずには手



が著けられない」と秀麿は思う。

このとき、鷗外は、秀麿の友人の画家・綾小路を登場させ、「かのように」(Die Philosophie des Als) を議論させる——「点と線は存在しない。例の意識した嘘だ。しかし点と線があるかのように考えなくては、幾何学は成り立たない。あるかのようにだね」「宗教でもなんでも、その根本を調べて見ると、事実として証拠立てられない或る物を建立している。即ちかのようにが土台に横わっているのだね」。

綾小路は続けて

綾小路「構わずにずんずん書けばいいじゃないか」

秀麿 「そうはいかないよ。書き始めるには、どうしても神話を別にしなくてはならないのだ。別にすると、なぜ別にする、なぜごちゃごちゃにして置かないかと云う疑問が起こる。どうしても歴史は、画のように一刹那を捉えて遺っているわけにはいかないのだ」「正直に、真面目に遣ろうとすると、八方塞がりになる職業を、僕は不幸にして選んだのだ」。

とのやり取りがなされる。

歴史家の悲哀の告白はさておき、鷗外「かのように」においては、神話と歴史を区別することをめぐっての論点が記される。これは天皇制の神話への批判ではなかろう。逆に、天皇制神話のしたたかさをこそ鷗外は描き出し、この「かのように」の作品こそが、天皇制の神話を支えていっていると私は思う。鷗外は「神話」と「歴史」の関係への苦悩を明示することにより、その論点を自覚した支配イデオロギーとして天皇制の神話が存在していることを、叙述している。神話の限界を知りつつ「かのように」ふるまう「神話」が記され、このことにより天皇制の神話は強化されることになる。

いわば「神話崩し」を折り込みながら叙述される神話により、支配のナショナリズムが強化されているのである。「かのように」の一編は、鴎外のしたたかさが大逆事件のあとに発揮された作品として読める。

大急ぎで付け加えるが、大逆事件後の「神話崩し」を指摘する宮沢の議論がナショナリズムを唱えているとっているのではない。また、(宮沢が取り上げた)田岡嶺雲がナショナリストであるといっているのでもない。ここで私が主張したいのは、大逆事件により「神話崩し」がなされるとした「戦後歴史学」にナショナリズムが見られるということである。「神話崩し」の「神話」があり、「神話崩し」も、いまひとつのナショナル・アイデンティティの探求であるということである。神話を崩したと思ったことによって、そこにいまひとつの「神話」(この場合は、自明の価値)が生み出されてしまう。「神話崩し」は、「〈起源神話〉」に断絶を持ち込み、かかるがゆえに、背後にいまひとつの「神話」を背負っている。

以上の考察を経たときには、「〈起源神話〉」として(「昭和維新」のあと、1940年にとなえられた)「紀元2600年」をみなすのは、語呂合わせ以上に水準の低い冗談としか思えないであろう。「紀元2600年」の祭は、関係者によっても虚構として振る舞われていた。「〈起源神話〉」といったときには、「神話」であることが自覚されないものこそが、その本来的な意味合いにおいて資格を有するものである。

現時において指摘できるのは、たとえば「戦後」という「〈起源神話〉」である。「いま」の価値を自明化するものとして〈起源神話〉が効力を発揮するが、「戦後歴史学」もそうしたものの系列にある。佐藤卓巳が「神話」という言葉を用いて、「終戦記念日」が「8月15日」に固定されたことを歴史的に検討し、それを崩す試みに挑戦したのは(『8月15日の神話』筑摩書房、2005年)、こうした文脈において賛意を表することができる。

### 3. むすびにかえて

このように「〈起源神話〉」を考察したときには、宮沢の仕事の意味はあらたな相貌を見せてくるであろう。まずは、明治維新の議論を史学史のなかに引き出したこと。これは、1)「明治維新の再創造」に参画した歴史学を浮き彫りにし、2)その行為をなす歴史学を、「近代ナショナリズム」と関連させ、3)国民国家の構築との密接な関連を明らかにする作業であった。また、4)歴史学の行為がいかなる意味を持つかを解明していくことともなった。史学史的な検証をおこないながら、いわば、近代における歴史学をめぐる「神話」と「神話崩し」を宮沢はおこなったと言いうる。

ここでの「神話」とは「近代日本」の出発（起源）を探る営みであり、「明治維新」に集約される歴史観である。また、「神話崩し」とは、明治維新によって誕生した「近代日本」が完全なものではなく、たえず批判を内包していたという歴史認識である。すなわち、宮沢が俎上にあげたのは、統合と抵抗という図式によって「近代日本」を描こうとする歴史認識そのものであったといえよう。国民国家を歴史叙述の局面から創出する近代歴史学の営みそのものを、「明治維新」の歴史像の検討を通じて批判する議論として、宮沢は「明治維新の再創造」を論じている。

宮沢は、歴史学が「明治維新」をいかに論じたかをたどり、歴史学が「神話崩し」を折り込んだ「神話」の創造をおこない、国民国家の構築——ナショナリズムの形成にコミットしていくことを、具体的に状況のなかにおいて指摘していった。宮沢のこの営みは、逆に、時間軸とともに内在的な関連——「維新」の間テキスト性で解釈しようとし、この観点ゆえに「〈起源神話〉」という分析が生み出されたといってもよい。

宮沢の営みは近世史研究の脱構築であり、ひいては「戦後歴史学」への送葬歌でもあるように、私には思える。「戦後歴史学」が国民国家を批判するのではなく、そこに加担をしてきたことを解明したことに宮沢の探求——「〈起源神話〉」

としての明治維新」と『明治維新の再創造』の意義が認められよう。これぞ「戦後歴史学」が折り込むことができなかった「神話崩し」であり、そのことを遂行的に実践したことに、宮沢の仕事の意味があると思う。

## 付 記

本稿は、2008年3月8日、宮沢誠一さんの九州国際大学退任のときに行われたシンポジウムの際の報告原稿をもとに作成したものである。宮沢さんが「〈起源神話〉としての明治維新」という報告を準備されており（あらかじめ、パネリストに配布されていた）、その報告を念頭に置きながら準備・作成したものである。冒頭に述べたように、宮沢さんからははかり知れないほどの学恩を受けており、私にとり、このシンポジウムに参加させていただいたことは、このうえない喜びであった。

宮沢さん、また細かな実務を行ってくださった高田実さん、ともにパネリストとして参加した畏敬する井野瀬久美恵さん（甲南大学）をはじめ、関係者の方々に厚くお礼を申し上げます。いかにも宮沢さんを囲むにふさわしいシンポジウムであったと思うとともに、こうした企画を実現した九州国際大学の関係者の方々に、深く敬意を表します。